

医療と介護の枠組みが大きく変わってきた。理学療法においても医療から介護へのシフトが進められている。社会制度そのものが多くの課題を持っており、介護保険が未熟なまでの医療からの移行に現場の不安も強い。一方で、不安定な時期こそビジネスチャンスでもあり、介護保険下での理学療法を積極的に展開して職域を拡大している人たちもみられる。介護予防における理学療法士の活動内容も問われているが、特に客観的な運動器の評価と機能向上については確かな専門性が問われる。医療から介護への移行における課題と展望を示し、実際に介護保険下で積極的に活動している理学療法士たちから、その取り組みと心構えなどを紹介していただいた。

■医療から介護への移行と課題（浜村明德論文）

医療から介護への移行（つなぎ）においては、実践されるべき対応とそれを実践する仕組みの双方に課題がある。2006（平成 18）年度の研究事業では、円滑な移行には、①ソーシャルワーカーの病棟専従配置、②つなぎ業務の基準化、③リハビリテーションサービスの充実が必要であることを提案した。2007（平成 19）年度は、①円滑な移行に資する活動基準（実施時期・職種・項目）を具体的に示し、②その活動基準を医療・介護のチームで実践するための仕組みについて提案した。

■介護保険による理学療法の展開（塩中雅博論文）

近年、理学療法士を取り巻く状況は急激に変化している。医療分野における需要が限界に近づいている今、われわれは自らの専門性を再確認し、従来の領域にとどまらない様々な展開を考える必要がある。介護保険サービス、保険の枠組みを越えた自費サービスなど、理学療法士だからこそ実現可能な地域に貢献できるサービスへのニーズは非常に高まっている。本稿では、筆者らの地域での取り組みの一部を紹介する。

■介護予防と運動器の機能向上（大淵修一論文）

介護予防とは高齢者が要介護状態に陥ることなく健康でいきいきとした生活を送れるように支援することであり、加齢に伴い現れる疾病と呼びにくい心身機能の低下を改善することでこれを達成しようとしている。特に、運動器の機能低下は高齢期の生活を阻害する大きな要因であり、重点的な対応が必要と考えられている。これを理学療法の範疇としていく場合には、対象の違いを認識し、客観的な効果分析により、効果を検討していく必要がある。

■座談会「介護保険下の理学療法—課題と展望」

介護保険制度の導入から 8 年が経過した現在、理学療法業務や対象者にどのような変化があったのか、他職種との連携のあり方と地域での関係作り、維持期における理学療法効果を示す必要性、求められる資質と人材育成のありかたなどの話題を通して、介護保険下の理学療法をどのように捉え、今何をすべきかを考える。

とびらページの書道作品について

たいかいうおおど まか
「大海魚躍るに任す」

解説：海は広い